

## S2-01

### 患者安全を軸足として、医療安全活動を再考する

日本赤十字社 事業局 医療事業部 医療安全課

○杉山 良子

2000年代に入り、それまでの「事故は起こしてはならないもの、だから個人の注意で防ぐことができる」という認識から、「事故は起こりうるもの、だからチームや組織全体のあり方を改善しなければ、事故は防止できない」というように考え方が転換されてきた。それに伴い、国は医療安全管理体制の確立にむけての施策を推し進めてきた。赤十字医療施設全体においても、医療安全管理体制の整備が図られることとなり、本社もそうした取り組みへの支援の一端を担ってきた。今年度の日本赤十字社における医療事業部のあり方を述べた中に「信頼のブランド」がある。信頼のブランドは日赤病院グループとしての強みの一つに数えられている。2006年の医療法改正による「安全・安心の良質な医療の提供体制の確立」に向けた取り組みこそ、信頼のブランドをつくりあげていく基盤となっていく。医療の質向上は、標準化と継続的改善によって行われるといわれている。そして、質向上の成果を評価し保証するための臨床指標（：管理項目）を決定することにあり、アウトカムとプロセスの両方の指標を定めることが必要とされている。ここでは、プロセス指標に関連してプロセス指向、PDCAサイクルを回す改善等について安全の切り口から論じてみる。そして、現在の赤十字における事故防止の取り組み活動と「質」の向上と評価における将来の取り組みを考えたい。併せて、本社として取り組み活動を推奨してきた「医療安全全国共同行動」についても触れる。

## S2-02

### 医療安全推進室長としての役割

伊勢赤十字病院 医療安全推進室<sup>1)</sup>、  
血液・感染症内科<sup>2)</sup>

○玉木 茂久<sup>1), 2)</sup>

【はじめに】私が医療安全推進室長を拝命してから7年余となるが、浅薄な知識の中で取り組んできた今までを振り返るとともに、ゴールはないが確実に進化している医療安全のこれからについて述べる。

【医療安全の流れ】市中病院が医療の安全を意識し始めたのは、患者取違えや消毒薬の誤注射が社会問題化した1999年である。2002年国は医療安全推進総合対策で「医療安全の確保が医療における最重要課題」と位置付けた。2005年5月当院に医療安全推進室が発足し、問題集約の枠組みが整った。2006年前置胎盤妊婦を救おうとした産科医が逮捕され、医療安全の考え方が大きく変わる。11月第1回医療の質・安全学会が開催され、12月病院機能評価機構から最初の医療安全情報が発信された。情報共有の重要性が認識され、個別の安全対策からチーム医療や組織的安全対策へと変化していく。

【室長の役割】具体的業務は、毎週の医療安全推進室会議と月一回のMRM委員会、管理会議等での報告、研修・講演会の設定、死亡診断書の検証、事例報告の確認と返事、事故の聞き取り調査、マニュアル策定などである。専任リスクマネージャーを中心とした取り組みを支援し、院長の指示を受けリーダーシップを発揮することと考える。

【室長の課題】昨今安全意識は確実に高まっているが、医療現場の意識と理想との乖離は依然として存在しており、医療安全文化の醸成が必要である。重要情報をいかに効率よく繰り返し発信するかも課題と考える。室長に必要な要素は、積極的関わり、妥協する勇気と強く求める勇気、バランス感覚、楽しむための工夫である。

【まとめ】医療安全推進室は、専門分野で活躍する各部署を横断的に繋ぐ役割である。病院という組織を繊維に例えるなら、華やかな縦糸を支える地味な横糸であり、その横糸の数（仲間）を増やし強固な組織を目指すことが室長の役割と思う。